東京学芸大学・総合的道徳教育プログラム

第４回 道徳授業パワーアップセミナーのご報告

多数のご参加，ありがとうございました。

2013 年 8 月 9 日，本学の「総合的道徳教育プログラム推進プロジェクト」主催の上記セミナーが本学の S410 教室で開催されました。当日は近隣三市や東京都内はもとより，北海道から沖縄にわたる全国各地から，現職教員及び教育関係者，教職を志す大学生等 227 名にご参加いただきました。

このセミナーは，本プログラムの第 1 プロジェクトの一環として，主として小中学校の教員に研修の場を提供することを目的として開催されました。平成 22 年度から毎年 8 月に実施しており，回を重ねるごとに規模が大きくなっています。

4 回目の本年度は次のテーマの下，開催されました。

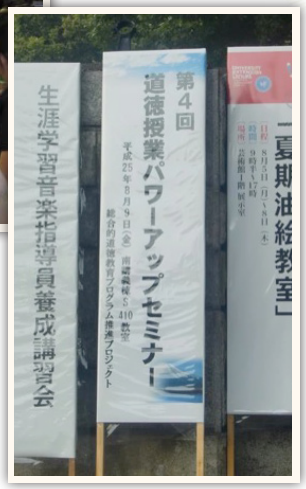
道徳教育の新しい動きをとらえて，道徳授業の可能性をひらこう

セミナーは，午前の (1) 講話に始まり，午後は (2) 道徳授業の実践発表，(3) パネル討議，(4) 学校長からのメッセージ，(5) 全体協議と続きました。そのプログラムと提案内容の詳細は、当日配布冊子の各資料等をご覧ください。

開催された内容について，それぞれの概要を以下にご報告します。

セミナーの概要

(1) 本学道徳教育担当教員による講話	10：00 ― 12：20
(2) 小・中学校教員による道徳授業の実践発表	13：20 ― 14：20
(3) 実践発表に基づくパネル討議	14：20 ― 15：20
(4) 学校長の立場からのメッセージ	15：35 ― 16：00
(5) 質問を受けての全体協議	16：00 ― 16：40



（1）本学道徳教育担当教員による講話

開会挨拶に引き続き，２つの講話がなされました。

まず，本学教員（永田繁雄）から，「道徳教育の新しい動きと期待される道徳授業」の観点より，道徳教育の現在の関心の高まりの状況とそのとらえ方と，道徳授業の一層の改善のための工夫などについて講話がなされました。

続いて，本学教員（松尾直博）より，「心の危機を乗り越えるための道徳授業をつくる」という観点から，現代の子どもたちが直面しつつある危機と，それを乗り越える道徳授業のあり方などについて講話がされました。

■ 講話①　道徳教育の新しい動きと，期待される道徳授業　　永田　繁雄（本学教員）

☆　平成の四半世紀を経て，これからの道徳教育と道徳の時間をどうするか

1．子どもが「生き方の選択肢」を広げる道徳教育にしよう

2．道徳教育についての最近の新たな動きをどうとらえるか

3．豊かな道徳的学び（「生き方」の学び）を促す授業をイメージしよう

4．道徳授業の発問について発想を広げよう

5．道徳授業の一層の改善のための３つの具体的な在り方

☆　子ども自身がもつ伸びる力を大切にした道徳教育・道徳の時間を…

■ 講話②　心の危機を乗り越えるための道徳授業をつくる　　松尾　直博（本学教員）

1．危機のありか（子どもの現状と道徳教育について　各種調査のデータより）

2．迫り来る危機（生きる支えとなる物語について　マクレオッド（2007）より）

3．危機を乗り越える道徳授業（⑴対話する，⑵選択する・決定する）

（2）小・中学校教員による道徳授業の実践発表

午後はまず，小・中学校の教員３名による道徳授業づくりの実践提案がなされました。

私と道徳授業開発（これからを展望する道徳授業づくり）

■ 提案①　「道徳ノート」をきっかけとした つながり，深まる授業　―子どもの発達に伴う変容―

前田　良子（東京学芸大学附属小金井小学校）

１．はじめに　～道徳ノートとは～

⑴　自分を見つめるきっかけとしての「道徳ノート」

①　話し合いのタネ　　②　話し合いの芽　　③　授業・話し合いを終えて

２．道徳ノートを用いた，２年生　４年生　５年生の実践　～『おばあちゃんの指定席』より～

⑴　道徳ノートの比較　～「話し合いの芽」を中心に～

①　１時間の授業の流れ　　②　「話し合いの芽」の比較　～共通点と相違点～

⑵　話し合いの実際

①　つぶやきからつながる話し合い…第２学年の実践　　②　友だちの思いをつなげる話し合い…第４学年

③　視野を広げてつなげる…第５学年

３．終わりに　～子どもの発言をつなげるために～

■ 提案②　「問い」続ける道徳授業　　**谷口　雄一（和歌山県和歌山市立鳴滝小学校）**

１．道徳の「教科化」の議論　～その背景～

⑴　現在の子ども

⑵　現在の道徳授業

２．「問い」続ける道徳授業

⑴　子どもが自ら「問う」

・　導入　～広げる？せばめる？～　　・　中心発問　～場面発問か　テーマ発問か～

【実践例１：第４学年 ないた赤鬼】【実践例２：第６学年 ロレンゾの友達】

⑵　授業が終わっても「問い」続ける

・　子どもの考えをさらに「問う」　～プリントや道徳ノートの活用～

・　互いの思いをシェアする　～学級通信～　　・　授業の足跡を教室に　～教室掲示～

⑶　大人も「問う」

・　資料を読む　～何を読むのか～　　・　指導者の立ち位置　～授業を創る一員として～

⑷　保護者にも「問う」　～発信し，共に育てる～

■ 提案③　生徒にとって魅力ある道徳の授業を目指して　―生徒から学んだこと―

鴨井　雅芳（東京都目黒区立第三中学校）

１．はじめに

２．生徒にとって魅力ある授業とは

３．道徳の時間を進める上で大切なこと（八か条）

４．実践事例（「いつわりのバイオリン」を資料として）

５．発問構成

６．「いつわりのバイオリン」２Ａ みんなの考え

７．資料「いつわりのバイオリン」

（3）実践発表に基づくパネル討議

実践提案に引き続き，廣瀬仁郎先生（埼玉県羽生市立井泉小学校長）のコーディネートのもと，上記３名の実践者によるパネル討議が行われ，参加者からの意見や質問をもとに協議を深めました。

子どもと社会の期待にこたえる道徳授業をどうつくるか？

コーディネーター：廣瀬　仁郎（埼玉県羽生市立井泉小学校長）
パネリスト　　：前田　良子（東京学芸大学附属小金井小学校）
谷口　雄一（和歌山県和歌山市立鳴滝小学校）
鴨井　雅芳（東京都目黒区立第三中学校）

【討議の概要】

1．内容を深める切り返しや補助発問をどう授業で生み出せばよいのか。

・中心発問という入口からどう深めていくかが重要。子どもの発言をそのまま受け取るのでなく，「それってどういうこと？」ともう一回聞いたり，ある発言に対して他の子が考えをつなげたりしていくことで深まっていく。

2．担任の先生の力や方針によって内容が違うことについてどう考えるとよいか。

・答えを教えていくのではなく，自分が何を大切にしていきたいと考えているのかを含めて，何を考えるのかがはっきりと見える授業をしていくのが大事。

・道徳は学級経営が基本で，特に担任のカラーがあるもの。道徳の時間は教え込みの時間ではなく，子どもが楽に話ができるような状況をつくり，担任のカラーでやっていくことができる。教員のもつ雰囲気，学級の雰囲気，資料，学年の段階など様々なものによって授業は異なるが，教科以上に教師の持ち味を生かすことが大切。

3．資料から離れた段階（いわゆる「展開後段」）がないとき，子どもたちの自覚化が図りにくく，問題を感じるが。

・登場人物に自分が重ねて考えられればよいと思う。分けて考えることはしていない。

・子どもの内面は見えるものもあれば，見えないものもあるため，じっくりと，子どもの行動や言葉を確認しながら見とっていくしかない。最終的には，長期にわたって子どもたちがどう変わったのかを見通し，比べるというのが大事なのではないか。

4．道徳教育をパワーアップしていくにはどんな展望があるか。

・自分がどう生きたいかというのを自分自身が考えられる授業が大事。自己主張と協調のどちらも重要で，道徳的な価値は硬直的なものではなく，とても懐の広いものだと思う。

・若手も中堅もベテランも一番疎いのが道徳の授業だと思う。みんな悩んでいるのだから本音や情報を交流するところからスタートしたらよいと思う。

・道徳の教科化は，授業時間が確保できる面はよいが，価値の押し付けのような授業も現在多く，教科だから教えなきゃいけないと先生が勘違いしそうな不安がある。

5．パネル討議のテーマの一つの「社会の期待にこたえる道徳授業」という部分はどのように理解したらよいか。

・企業のニーズとしては「コミュニケーション能力」の育成がある。子どもたちは協調性と自主性というバランスが取れていない。その点を考えていく必要がある。

・いじめの問題があるが，いじめをなくす授業をするとなると，その問題の直接の指導になりがち。いじめについて「これは許せない」と自分で考えられる力を身に付けさせたい。
・目の前のいじめへの対応というより，長期的に心を耕すことが中心となると思う。
・子どもは誰もよりよく生きたいと願っている。やはり，子ども自身の生き方につながる長期的な問題に答えることにつながる授業作りが重要かと思う。
・自然な形で子どもたちが学べることが大切。その際，「啐啄同時」という言葉がヒントになる。卵の雛が内側から卵をつつき，親鳥が出そうとして外側からつつく。雛が殻の外へ出ようとしている部分を，親鳥が探して軽くつついてあげる。そして，雛が自分自身の力で生まれてくるように支援してあげるのがポイントだと考える。

（4）学校長の立場からのメッセージ

午後の後半は，高橋妃彩子先生より，以下のテーマのもと，学校長の立場からメッセージをいただきました。

学校で一体となって取り組む道徳教育

高橋　妃彩子（東京都渋谷区立加計塚小学校）

メッセージの柱立て

1．学校の様子
2．道徳教育の推進・・・校長の思い
⑴　学校経営の視点から
⑵　児童に育てたい道徳性，保護者の願いから
⑶　道徳の授業力アップを目指すために
3．学校で一体になって取り組む道徳教育を推進するために
⑴　研究組織
⑵　道徳教育推進教師の役割
⑶　研究内容
4．心に響く道徳授業の工夫
5．学校全体の道徳教育

提案の詳細は、当日の冊子をご覧ください。

（5）質問を受けての全体討議

その後，登壇者すべてが参加して，和井内良樹（東京学芸大学附属大泉小学校）のコーディネートによる Q&A と全体協議が行われました。

協議・Q＆A：授業の疑問をといて２学期にそなえよう

【質問と回答の要旨（一部）】

1．授業中にテーマ発問をどのように設定するのか。小学校低学年でも可能か。

・本日の資料にもあるが，中心テーマとして設定して進める方法，中心発問に重ねる方法，中心発問から発展させる方法など，主として３つの方法がある。

・小学校低学年でも，例えば，「はしのうえのおおかみ」で「オオカミはなぜ変わったか」「どんなふうに変わったか」などと，テーマ発問が可能だと思う。

2．総合的道徳教育プログラムの「総合的」は，どのような意味なのか。

・地域との連携，全学的な連携，教科等の横断的連携などの幅広いアプローチを意味している。HP を参考にしていただきたい。

3．意欲や態度の観点に着眼した指導は，どのようなものか。

・子どもが具体的な行為のイメージがはっきり持てるような促し方が意欲・態度の指導。ただし，生活指導（生徒指導）との違いを踏まえることが重要。

4．複数時間扱いとは一資料を数時間行うことか。それとも各教科との関連を図ることか。

・解説書の中にその趣旨や在り方が複数箇所に記述されている。一つの題材を複数時間続けることも，いくつかの題材をつなぐこともある。柔軟に発想したい。

5．１時間の中で複数の内容項目を扱う場合はあるのか。

・例えば，ある人物の生き方を取り上げるとき複数の価値が伴うことも考えられる。

6．道徳の時間でスキルトレーニングのような指導はどのぐらいできるのか。

・道徳の時間は基本的にはトレーニングタイムではないが，授業の中でその方法を活かすことは可能。その際，トレーニングそのものを目的とするのではない。

7．板書全体の構造化についてポイントを知りたい。

・構造化には，資料内容の構造，人物の構造，価値観の構造，価値観の違いの類別化など，様々な方法がある。事例をたくさん見ることをおすすめしたい。

8．１クラス 10 人以下の少人数，小規模学級で，深まりのあるようにするポイントは？

・「こたつ学習」という互いに向き合う場の設定が効果的。教師が仕掛けを作ったり，複数の子どもをあえて演じたりする方法もある。色濃い手立てを組みたい。

9．フレーム思考とスタイル思考はどのように違うのか。

・フレームはお弁当箱のように，授業の形が厳格に決まった形骸化。一方，スタイルは，形そのものがファッションスタイルのように多様さがあるのが前提。

10．「展開後段」という言葉を初めて聞くが，後段は必ずあった方がよいのか。

・子どもが自己の生活，体験，生き方に即して資料の中で考える仕掛けがあれば，展開後段を置かないこともある。ただ，小学校低学年などでは資料での話し合いと自分のことを考える時間を切り離す方が分かりやすい。100%か 0%ではない。

11．指導いただく先生が，「資料を使わないと道徳ではない」「２つの資料を使うのは道徳ではない」と話される。

・指導的立場の人ほど柔軟であるべきと思う。資料が基本的には必要だが，多彩な資料を生かした事例を持ち寄ることで授業に柔軟さを出すようにしたい。

12. 副読本や出版されている資料を使うときのヒントを知りたい。

・著作権上の問題から，印刷をしなくても資料を閲覧できる環境をつくることが最低限必要。また，一つの副読本は個人持ちとし，その他に複数が備え付けてあれば，資料の活用の幅は大きく広がる。

13. 新聞記事や視聴覚教材を使いたいのだが，年間指導計画が決まっていて難しい。

・年間指導計画は基盤とするが，解説書では年間指導計画を柔軟に変えていくべきことを前提としている。子どもは今の時代の空気を吸っているので，今の新聞や報道などの資料も効果的に織り込むことが求められる。

14. 教科化によって，教育活動全体で行う道徳教育はどうなるのか。

・教育活動全体で行う道徳教育は，人間形成の力としてこれからも続けられる。

15. 国を愛する心ではなく，伝統文化を理解する教育に努めるべきではないか。

・伝統や文化など我が国がもっているものについて，子どもなりの形で自然に愛着がもてるように応援することは道徳教育の一つの形だと考える。

16. 教師が押し付けないのは大切だが，生徒が考えていることが常に正しいとは限らないのではないか。

・（私の事例では）子ども自身に気付いてほしいと思ったため，そのときは何も言わなかった。最終的に気付かないまま終わったり，何年後かに気づいたりするかもしれないが，子どもの方から出してほしいと思った。理想としては，他の子どもから「その見方は違うのでは」という議論が起こることを期待している。

17. 道徳の授業で生徒の話が深まらない。どうすれば生徒が意欲的に授業に向かえるか。

・教師が授業をするのが辛いと思うと，生徒も絶対につらいと思う。学級経営の中で生徒との信頼関係ができていると楽しくできる。（今日の冊子の提案の中にある）８カ条を頭に入れて実践していくことが大切だと考える。

・終末の部分で子どもは結構色々なことを考えている，それを教師が「こういうものだよ」と一つにまとめては子どもの意欲を損ねる。教師の説話で方向付けるというより教師の願いを伝えるなど肩の力を抜いたものとしたい。

18. 学年はじめ，学期はじめの授業で意識すべきことは何か。

・「道徳の時間はどのような時間なのか」「道徳は何を勉強するの」と問いかける。次に，本校が重点的に取り組んでいる読み物資料を使い，登場人物がどんなことを思ったのかを考えてもらう。そして，「『自分だったらどうしていくのか』を話し合い自分の答えをみつける」のが道徳の時間だということを子どもと一緒に話し合う。

19. 道徳の授業で失敗したと思うのはどんなときか。

・子どもは授業で黙っていても，意外に考えていたり，授業を印象深く覚えていたりする。静かであると教師が心配になってつい次々と話してしまうが，それでは子どもの思考が停止する。常に子どもと共に成長する姿勢で話しかけるようにしたい。

参考：受講者によるアンケートより

終了後，多数のアンケートをいただきました。結果を過去のものと共にご報告します。

■回答者の所属

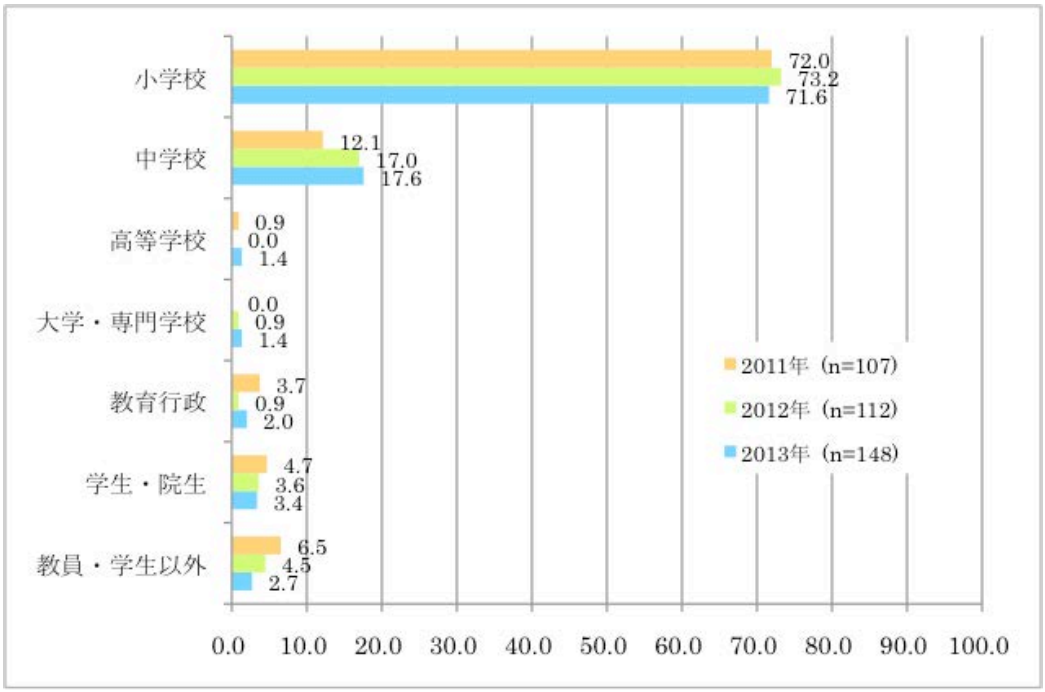


図１．参加者の勤務先等（%）

この結果から，今回（2013年）小学校の教員が多く、続いて中学校の教員が多かったことがわかります。

■セミナーに参加した理由（２つまでの複数回答）

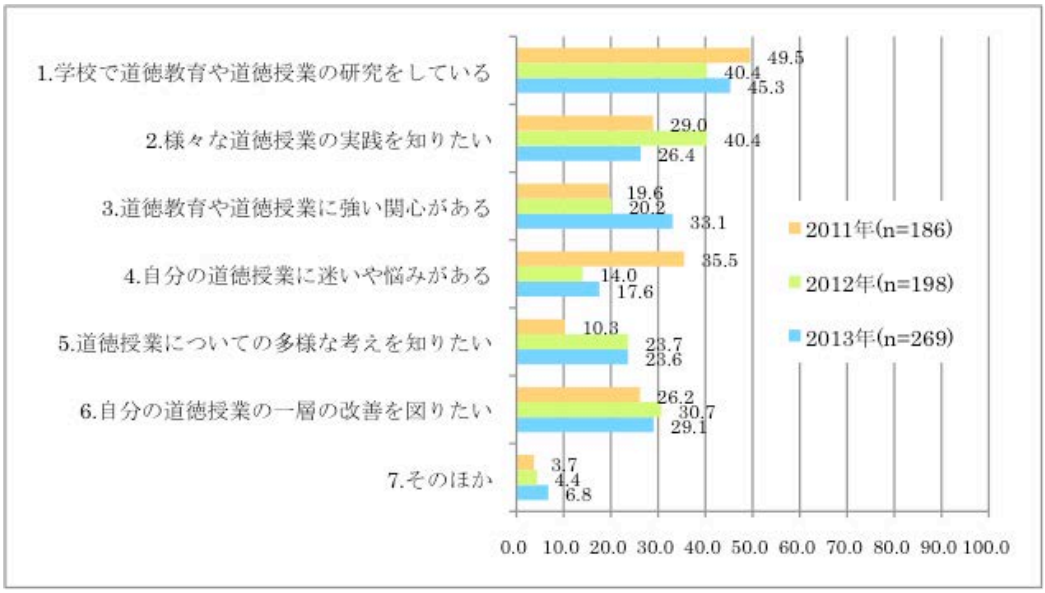


図２．参加理由の年度別比較（２つまでの複数回答 (%)）

2013 年は「1. 研究している」という回答が，「4. 悩みや迷い」「5. 多様な考え」「7. そのほか」より多くみられました。また，過去よりも「3. 強い関心がある」が多く回答されていました。

■参加者の感想・意見

また，アンケートによって様々な感想やご意見をいただくこともできました。

記述していただいた回答の中で，参加された先生方の感想や意見の全体的な傾向が分かるもの（各概要）を中心に，以下に整理しました。

＜講話について＞

・今年で教員１２年目になるが，子どもが年々変化してきていると感じている。今日のお話で，その点をきちんとデータで見ることができ，スッキリした。

・今年から初めて道徳の授業をしている。基本から新しい動きまで教えていただいて大変勉強になった。

・話は楽しいが，次々と話が飛び内容を理解しづらいことがあった。

＜講師のメッセージ，Ｑ＆Ａについて＞

・学校全体として取り組む道徳教育の推進が参考になった。自分の学校でも道徳教育を課題に取り組んでいるので，いいなと思うことは参考にしたい。

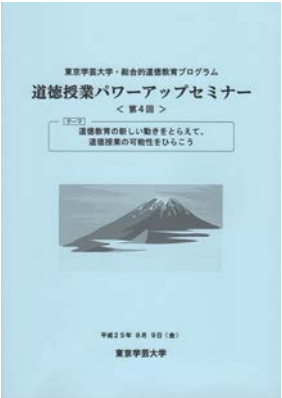
・「みんなが研究しやすい雰囲気づくり」は大事だと感じた。研究授業は学年でつくり上げないと，個人の負担が大きくなり，前へ進めないと思った。

・担任一人で準備をするのはとても大変なことだし，作った資料が無駄になってしまうので，学年ごとの資料の保管場所があるのは良いと感じた。

＜今後役に立ちそうなこと＞

・東京学芸大学のホームページから資料をダウンロードして役立てたい。

・速効性を期待するのではなく，生徒に投げかけ，考えさせる道徳の授業をやり続けることが生徒の変容につながるという点が参考になった。



＜私の道徳授業，パネル討議について＞

・普段は小学校の実践を見ることがほとんどなので，中学校の先生の話を聞くことができて参考になった。また，若手の熱心な取り組みに自分もがんばらねばと思った。

・すぐに効果が出ると思わず，くり返し行い続けることで，子どもの心にじわりじわりと浸っていくような道徳を続けていきたいと改めて思った。

・パネル討議については質問に３人の先生方が答えるという形のみだったので，様々な先生からさらに様々な意見が出るとよかったと思う。

＜全体について＞

・勉強になることが非常に多かった有意義な一日だった。来年以降もまたぜひ参加したいと思う。

・疑問に思っていたことがたくさん質問として出されていたので，最後の応答コーナーがとてもためになった。

・様々な視点，様々なタイプの道徳観を紹介していただき，とても参考になった。

・発表内容は素晴らしいので，時間の区切りをよりきっちりとしていただけるとありがたい。

＜今後に期待したいこと＞

・道徳資料の吟味のスキルがないので具体的に資料を使っての教材研究（資料吟味？）のワークショップも含めてほしい。

・例えば，模擬授業をしていただくなど，達人技をじかに体験したい。

・テーマが分散している印象もあるので，パネラー，メッセージ，講師の先生方との共通認識をもって進めていただくとうれしい。

いただいた貴重なご意見やご感想を，今後の同事業や本学のプログラム全体の改善に生かしていきたいと考えています。ありがとうございました。

（文責：柄本健太郎，構成：荻原香織）